

掛巻も綾に恐き、大本皇大御神、厳御霊、瑞御霊、相殿に坐す産土大神の宇豆の大前に、

いわひぬし

斎主 木庭次守長男 木庭元晴伊 慎み敬ひ恐み恐みも白さく。

まを

木庭次守の『靈界物語』大事典編纂のために、諸人等が一致協力して、日本タニハ文化研究所の館を建設営み竟へつるは つくりいとな はるか半世紀前のことにして、明日の令和六年十月十八日は、その五十周年にあたる。

今日の二ヶ月前、八月十七日は木庭次守毘古昇天して三十一周年となれり。奇しくもその日は 聖師の旧暦生誕日七月十二日に当たりし。今日はしも、満月の日にめぐまれにける。

木庭元晴の長男、木庭太郎は、眞弓周子と結婚し、長男耀太（令和四年二月二十三日生）、長女花夏（令和六年七月十七日生）に恵まれ、この佳き日に参拝同席しておりぬ。

みたまのふゆ

大神等の恩 頼に依れる事となも嬉しみ悦び、今日の生日の足日の良き辰に、とき 同席し

とりおこな

すす

てタニハ館の五十周年祭を執行ふ由を奏め上げ奉むと、御前には御酒を始め。海河山野の種々の多米津物を横山の如く置き足はして、称へ言竟へ奉らくを、平けく安らけく赤丹あかにの穂に間食し相諾ひ給ひ、天のはて地の極みもおつることなく、照らす光とあらはれし。岐美あきらけき 神の大道を歩むべく、巖の光をわれに与へよと、宣示せ玉ふが如し。のりしめ

のち

今ゆ後、木庭元晴には、大本皇大御神、厳御霊、瑞御霊、産土大神、木庭次守毘古とそ

の協力者の方々の御守りのもとに、タニハ館の建物と資料の整理を全うさせたまへと白すう。まを

事分けて、木庭元晴昇天の後も、タニハ館が諸人等の『靈界物語』研鑽の場として、弥継ぎ継ぎに、世の為め人の為め心の限り力の極み尽くさしめ給ひ、木庭太郎家の功績を立てしめ給ひ、殊に日本タニハ文化研究所は弥栄に立ち栄え寄き集へる諸人などは、身体健康かに生命長く夜の守り、日の守りに、守り幸へ給へと、鹿児自物膝折伏宇自物頸根突抜きて恐み恐みも白す。まを

令和六年十月十七日